熊本方言におけるショル形の用法*

畠山　真一

1　はじめに

工藤（1995）が発表されて以降、西日本諸方言におけるアスペクト体系は、基本的に、完成相（スル形・シタ形）、不完成相（ショル形・ショッタ形）、パーフェクト相（シトル形・シトッタ形）の三項対立型であると想定され、完成相の意味は共通語と同様であるが、不完成相は、限界未達成性（終了限界に至っていないこと）を表現し、パーフェクト相は限界達成性（終了限界を超えてしまっていること）を表現すると考えられてきた（工藤 1999, 2000, 2004; 木部 2004）。本稿でターゲットとなる熊本方言も、他の西日本諸方言と同様に、アスペクト体系にショル形とシトル形を持ち、その対立は限界達成性に基づいたものという分析がなされてきている（島本 2008）。

しかし、二節以降で述べるように、若年層で使用されている熊本方言のショル形は、限界達成性（限界未達成性）という概念のみでは説明不可能なふるまいを示す。本論文では、熊本方言のショル形のふるまいを記述し、限界未達成性という概念のみでは分析できないことを示す。

2　若年層で使用される熊本方言におけるショル形
―宇和島方言との差異を中心に―

本節では、熊本方言のショル形・シトル形（以後、それぞれ熊本ショル形・熊本シトル形という表記を使うことがある）の意味・用法を、宇和島方言のショル形・シトル形（以後、それぞれ宇和島ショル形・宇和島シトル形という表記を使うことがある）と比較することにより、熊本方言の特質が何であるかを明らかにしていく。

具体的な記述に入る前に、本論文で使用されるデータについて述べておきたい。特に断りのない場合、

本論文で使用されるデータは、基本的に21歳から23歳までの熊本市在住の女性インフォーマント3名から得られたインタビューデータを使用する。以下で断り書きなしに「熊本方言」という術語が出現する場合は、このデータを意味する。

では、以下記述を進めていこう。

2・1　宇和島方言のシヨル形と熊本方言のシヨル形の基本的差異

本節では、宇和島方言のシヨル形・シトル形と熊本方言のシヨル形・シトル形を比較し、シヨル形で観察される基本的な差異について述べる。

反復・習慣や恒常的属性といった、イマ・ココの意味を離れた特殊な用法を除けば、熊本方言のシヨル形とシトル形の意味・用法は次のようにまとめられる（工藤 1999, 2000; 島本 2008）。

(1) シヨル形：

a. 動作の進行：子供らは、外で野球しヨル。

b. 変化の進行：ロウソクの火が消えヨル。

(2) シトル形：

a. 主体変化結果の残存：この牛乳、腐っトル。

b. 客体変化結果の残存：あの子、この間のテストを引き出しの中に隠しトル

c. パーフェクト：さっき、アイスコーヒーば頼んドル。[1]

d. 開始限界達成：お父さん、もう焼酎ば飲んドル。

一方、宇和島方言のシヨル形とシトル形は、次のような用法を持つ。

(3) シヨル形：

a. 動作の進行：ジョン、えさ、食べヨルぜ

b. 変化の進行：きのう、庭でへびが死にヨッタ

c. 状態維持：

・あんたの手袋、きのうからずっとそこにありヨル（「ありヨル」は、存在し続けているの意味で使用されている）

・ここに座りヨルぜ（「座りヨル」は、座った状態を維持している、という意味で使用されている）

d. 動作・変化の兆候：また、お酒飲みヨル（お

酒を飲むことの予兆が存在することを意味している）

(4)シトル形：

a．主体変化結果の残存：みかんががけの下に（がけから）落ちトル

b．客体変化結果の残存：あ、先生が窓開けトル

c．パーフェクト：あんた、さっき、おやつ食べトルやないの

d．開始限界達成：きょうは波が荒いのに、子供ら泳いドル

(1)、(2)が示すように、宇和島シトル形と熊本シトル形は、全く同様の意味・用法を示すが、ショル形に関しては、大きな違いを見せる。すなわち、熊本ショル形は、宇和島ショル形が持つ「状態維持」と「動作・変化の兆候」の用法が基本的に存在しない。ショル形における用法の差異を表にまとめると次のようになる。

(5)宇和島方言と熊本方言のショル形における差異

	宇和島方言	熊本方言
動作の進行	○	○
変化の進行	○	○
状態維持	○	×
動作・変化の兆候	○	×

以下、このショル形の差異について記述を行っていく。

まず、「状態維持用法の不在」について述べる。次の例文が示すように、熊本方言においては宇和島方言における「状態維持」の用法が、ショル形に観察されない。

(6)a．＊あんたの手袋、きのうからずっとそこにありヨルとよ

b．＊ずっと座りヨルけん、腰が痛かよ。

(6)の例文に関して言えば、以下の例文が示すように、熊本（肥筑）方言に特徴的なトやケンを宇和島方言で対応するものに変更すれば、宇和島方言においては正文となる。

(7)a．あんたの手袋、きのうからずっとそこにありヨルがな。

b．ずっと座りヨルけん、腰が痛いがな。

（6ａ）が例示するように、「ある」の熊本ショル形は、一般に、以下のような出来事名詞を主語に取る場合以外は、非文を作り出す。

⑻友達の結婚式がありヨル。

熊本方言において、⑻は、「結婚式が行われている」の意味で正文であるが、この種の例外を除けば、存在を表す動詞のショル形は見いだすことができない。有情物を主語にとる「おる」についても同様である。

このように、熊本ショル形には状態維持の用法がないため、「座る」、「立つ」、「寝る」といった姿勢変化とその結果維持を意味する動詞のショル形において結果状態の維持の読みを出すことができない。この結果、次の例文はすべて、進行中の姿勢変化を描写している（姿勢変化動作の進行中とも姿勢変化の進行中とも解釈可能である）。

⑼ａ．子供がベンチに座りヨル。

b．お父さんが、寝ヨル。

（9ａ）は、「ひざが曲がって、ベンチにお尻が着こうとしている」状況のみを描写可能であり、「お尻がベンチに着いた状態が継続している」状況を描写することはできない。同様に、（9ｂ）は、「父親の体が横になろうと体を動かしている」状況のみを描写可能であり、「横たわった状態の継続」を描写することはできない。

この点で、宇和島方言と熊本方言はするどく対立する。すなわち、宇和島方言では、姿勢変化を意味する動詞において、次の例文が示すように、ショル形とシトル形の意味がアスペクチュアルに中和するが、熊本方言では、対立が保持されてしまうのである。

⑽宇和島方言の場合：

ａ．座りヨル（座っている状態を維持する）

b．座っトル（座った状態が存続している）

⑾熊本方言の場合：

ａ．座りヨル（立っている状態から座る状態への変化が進行している）

b．座っトル（座った状態が存続している）

ただし、この一般化には例外が存在する。すなわち、静止状態を維持するのに労力が必要とされる場合は、状態の存続を意味するショル形が可能となる。次の

例文を見てみよう。

⑿ a．あの子、無理な体勢をキープしヨルね。

b．ずーっと、ドアを押さえヨル

このように、「無理な体勢をキープする」や「ドアを押さえよる」のように、状態維持に労力が必要とされるようなケースでは、状態維持をシヨル形によって表現可能である。[2]

もう1つ、宇和島シヨル形には観察されるが、熊本シヨル形には観察されない用法が存在する。（13）が例示するように、熊本シヨル形によっては、宇和島シヨル形と異なり、「動作・変化の兆候」を示すことができない（工藤 2000; 島本 2008）。

⒀ a．＊あ、ねこが魚、食べヨル（動作・変化の兆候の読みでは）。

b．＊あの子、池に落ちヨル（動作・変化の兆候の読みでは）。

宇和島方言においては、（13 a）は、「ねこが徐々に魚に近づいていきつつある」局面や「魚の入ったかごの中をのぞきこんでいる」局面で使用可能であるが、熊本方言においては一般に使用不可能である。同様に、（13 b）は、宇和島方言においては、「ふらふらして池に落ちそうになっている」局面で使用可能であるが、熊本方言では使用不可能なのである。

2・2熊本方言のシヨル形と内的情態動詞

本節では、熊本シヨル形に観察される奇妙な特質について述べておきたい。熊本方言は、感情・感覚といった外部から観察不可能な内面を表現する次のような動詞においては、シトル形は可能だが、シヨル形が欠けているという特質を持つ。

⒁ あきらめる、あこがれる、困る、あきれる、むかつく、照れる、しびれる、めげる、めいる、落ち着く、迷う、うずく、疲れる、しびれる、（のどが）かわく、（はらが）へる

これらの動詞は、工藤（1983）において「状態性動詞」の一種と分類されており、宇和島シヨル形と宇和島シトル形の対立が中和する動詞群とされている。ただし、アスペクチュアルに中和するものの宇和島方言においては、シヨル形もシトル形も形としては可能な動詞群である。このようなふるまいを見せる宇和島方言に対し、熊本方言においては、端的に、

これらの動詞には物に一人称主語をとる場合シヨル形が欠けており、シトル形のみが可能という非常に奇妙な状況が観察される。すなわち、次の例文はすべて非文となる。

(15) a．＊（わたし）あきらめヨル
　　b．＊（わたし）疲れヨル
　　c．＊（わたし）困りヨル

(16) a．（わたし）あきらめトル
　　b．（わたし）疲れトル
　　c．（わたし）困っトル

2・3まとめ

本節で得られた観察をまとめると、熊本シヨル形は次の特質を持つと言える。

(17) a．シヨル形に「動作・変化の兆候」の用法が存在しないこと。
　　b．いくつかの例外を除けば、シヨル形に状態維持の用法が存在しないこと。
　　c．工藤（1995）が内的情態動詞と呼ぶ外部から観察されない心的活動・心的状況を記述する動詞には、原則としてシヨル形がなく、シトル形のみが可能であること。

3おわりに

本論文では、熊本方言のシヨル形が宇和島方言とどのような点で共通し、どのような点で異なっているかを記述した。前節で述べたように、宇和島方言と熊本方言のアスペクト体系は、限界達成性に敏感であるという点では共通性を持ものの、シヨル形に関しては大きな違いを見せる。今後は、この共通性の上に、どのような独自性がかぶさることで、本節で述べたような差異が出現するかを分析する必要がある。

注

＊本論文は、２０１３年1月12日における九州方言研究会での発表（和田礼子氏、福田浩子氏、西村あい氏との共同発表）の一部をまとめたものである。

1「アイスコーヒーば」における「ば」は、対格を示す助詞の一種である。（2d）も同様である。

2「ドアを押さえヨル」の場合は、主体変化結果

維持とも、客体変化結果維持とも解釈できる。

参考文献

木部暢子(2004).「福岡地域のアスペクト・待遇・ムード」『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系』, pp. 166–186. ひつじ書房.

工藤真由美(1983).「宇和島方言のアスペクト(1)」『国文学解釈と観賞』, 48 (6), pp.101–119.

工藤真由美(1995).『アスペクト・テンス体系とテクスト』. ひつじ書房.

工藤真由美(1999).「西日本諸方言におけるアスペクト対立の動態」『阪大日本語研究』, pp. 1–17. 大阪大学文学部日本学講座.

工藤真由美(2000).「アスペクト表現の地域差—西日本諸方言を中心に—」『国文学解釈と鑑賞』, 65 (1), 34–44.

工藤真由美(2004).「研究成果の概要-アスペクト・テンス・ムードを中心に」工藤真由美(編),『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系』, pp. 34–76. ひつじ書房.

島本智美(2008).「熊本方言教材開発のための「ヨル」と「トル」の考察 —若者の使用実態を中心に —」馬場良二(編),『地方中核都市在住外国人のための方言教材の開発—その理念の構築と実際』, pp. 1–12. 熊本県立大学. 文部科学省科学研究費成果報告書.